様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３１４８

研究課題名（和文）ロシア統治下チベット仏教徒のチベット・モンゴルとの交流の研究

研究課題名（英文）Study on the relationship between Buddhists under the rule of Russia and Tibet-Mongol Buddhists.

研究代表者
石濱　裕美子（Ishihama, Yumiko）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：３０２２１７５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：1904年、ダライラマ13世は英軍のラサ侵攻を受けてロシアの支援を求めて北上し、1909年までの間、モンゴル・青海などモンゴル人居住域に滞在した。先行研究ではこのダライラマ13世の移動は、英露など大国の国際関係の文脈で語られるのみであったが、本研究はダライラマのモンゴル滞在がロシアの仏教徒と清朝治下の仏教徒の交流をもたらし、さらに、国境をこえてダライラマと地域との間を往復していたブリヤート人、カルムックの指導者たちが、ロシア帝国崩壊後に地域の自治運動の指導者となったことなどを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ダライラマ13世のモンゴル滞在は従来、列強に翻弄された結果の「逃亡」「亡命」などとネガティブに表現されてきたが、本研究は、(1) ダライラマ13世はロシアの仏教徒の自発的な警護により清朝の命令を無視し行動する自由を得ていたこと、(2) ダライラマ13世の下に国境をこえて巡礼が殺到し清朝治下の仏教徒と交流した結果、ロシア治下の仏教徒が地域をこえて聯繋し始めたことなど、仏教徒主体の視点からみたポジティブな歴史観を提示することに成功した。

研究成果の概要（英文）：In 1904, the 13th Dalai Lama moved north in search for Russia's support following the invasion of Lhasa by the British Army, and stayed in Mongolia and Kokenoor until 1909. In the previous study, this movement of the Dalai Lama XIII was only talked about in the context of international relations of large countries such as Britain and Russia, but this study showed the Dalai Lama's stay in Mongolia stimulated an exchange between Russian Buddhists and Buddhists under the Qing Dynasty and that the correspondents from the Buryats and Karmuk, who had traveled back and forth between the Dalai Lama and their homland across the border, became leaders of the local autonomy movement after the collapse of the Russian Empire.

研究分野：チベット仏教によって統合されたチベット・モンゴル・満洲世界

キーワード：チベット仏教　ブリヤート人　ドルジエフ　ダライラマ13世

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　1904 年英軍のラサ侵攻を避けてラサを脱出したダライラマ 13 世は、ロシアの支援を求めて北上し、その年の暮れにはハルハ・モンゴルの中心地イフフレー(現ウランバートル)に到着した。その後 1906 年には青海に移動しゲルク派の大僧院クンブムに滞在し、1908 年には五台山をへて、光緒帝・西太后に東チベットにおける清軍の撤兵を交渉をすべく北京に向かう。しかし両宮が急死したため北京を離れ、かつての敵であった英領インドのダージリンに逃れた。辛亥革命を受けて 1912 年に帰国したことによって終了するダライラマ 13 世のこの長期の外国滞在は、列強に翻弄された結果の「逃亡」「亡命」などとネガティブに表現されてきた。

(2)　帝国主義期においては軍事力のある大国のみに時局を動かす力があることから、この時期のダライラマの活動については、英・中・ロシアの大国間の国際関係からとらえることが大勢をしめており、当事者視点でなされた研究は僅少である。

(3) チベット・モンゴルなど当事者視点からなされた研究の場合も、現存する各国のナショナルヒストリーに囚われるため、ダライラマ 13 世の移動が地域に与えた影響についてはたとえばモンゴル史の視点からは、ダライラマはモンゴル滞在中、後に独立モンゴルの国王に推戴されるジェブツンダンパ８世と清朝からの独立を相談しあっていたなどそれぞれの近代国家形成の立場から断片的に言及されるにすぎなかった。

２．研究の目的

　ダライラマがダージリンに到着してまもなく辛亥革命が勃発し、その翌月にはハルハ・モンゴルは転生僧ジェブツンダンパ８世を国王に推戴して独立を宣言した。その一年後の 1912 年、ダライラマ 13 世は清朝軍が排除されたチベットに帰還し、中国との絶縁を表明した。この後、1951 年の中華人民共和国のチベット侵攻までチベットは事実上の独立状態 (de fact independence)となる。又、ブリヤートにおいても民族自治運動がおき、内モンゴル人と満洲王公の中から立憲君主制により満洲王朝を存続させる運動が始まる。良く知られたこれらの各地域の民族意識の高まりに、その直前におきたダライラマ 13 世のモンゴル・北京滞在が何らかの形で作用していた可能性は高い。
　本研究ではダライラマ 13 世のモンゴル・青海・北京滞在によってひきおこされた多地域からの巡礼たちの集結が仏教徒間の交流を促進し、それぞれの地域の民族意識の覚醒を促進したのではないかという仮説を実証することを目的とする。

３．研究の方法

(1)　モンゴル人やブリヤート人研究者はロシア語文書資料を豊富に利用するものの漢文史料の利用は比較的低調であること、一方在中国のモンゴル人研究者はロシア語資料の利用が少ないこと、また、モンゴル東部に進出していた日本はアクターの一つとして重要な位置にあるが、ダライラマ 13 世に関する日本語文献の解析はいまだ低調である。そして決定的なのは当事者であるダライラマ 13 世伝の利用を先行研究のいずれもまったく行っていないことが先行研究の盲点として指摘さりよう。本研究では以上の多国語資料を重層的に利用することにより、ダライラマの動向を地域から離れたより上の視点から、統合して評価する。

(2)　1904 年から 1912 年までのダライラマのチベット外での活動を、ダライラマ 13 世伝などを用いて、ダライラマ自身の行動、ダライラマ 13 世が受け入れた訪問者などをリスト化してダライラマ 13 世の宮廷にどのような地域からきたどのような人物が出入りし、また一般人巡礼の規模についても明らかにする。

(3)　上の作業を通じて明らかとなったハルハ・モンゴル、青海モンゴル、ブリヤート人などの王公について、彼等がダライラマにとってどのような働きかけをし、また、彼等自身がダライラマからどのような影響を受けたかを分析する。

４．研究成果

以下研究成果を箇条書きで陳べる。

(1) ダライラマ 13 世は滞在先の地域の僧院において戒律復興・仏教の研究と実践修行の復興を先導し、ゆるみきっていたモンゴル仏教界に綱紀粛正を行った。そのダライラマ 13 世の清廉さ

が各地からダライラマ 13 世の下へ巡礼をひきつけた。以上よりダライラマ 13 世の亡命はある時点(青海に入った頃)から「布教」になっていたことがわかる。

(2) ダライラマ 13 世の「移動」はそれぞれの地域(青海、ハルハ・モンゴル)のモンゴル人仏教徒たちの信仰に基づく経済的・軍事的支援によって可能となっていた。1904 年末から 1906 年までダライラマ 13 世は清朝の帰国命令を無視しモンゴルに留まり続けたが、それを可能としたのはロシアから越境してきた大量のブリヤート人巡礼たちによる経済的な支援と、警護であった。

(3)清朝・ロシアの地域行政によって分断されていた各地域の「モンゴル人たち」はダライラマ 13 世の下に信仰の力によって集結したことにより、同じ仏教徒であることを自覚することを通じて地域を越えた「モンゴル人性」を共有するにいたった。

(4) 地域を代表してダライラマ 13 世の接待にあたった王公は、そのままダライラマ 13 世と地域の連絡員となった。青海からはクルルク貝子、ハルハ・モンゴルからはハンドドルジ、ブリヤートからはドルジエフとナムダクノヨン(ディリコフ)、内モンゴルからは升允がでて、ダライラマ 13 世と自らの出身地域を結び合わせた。

(5)辛亥革命やロシア革命の後、清朝やロシアからの分離独立を求める動きがはじまると、これらの王公は地域のリーダーとなった。ハルハのハンドドルジは独立モンゴルの外務大臣となり、クルルク貝子はモンゴルが独立を宣言した際、青海のモンゴル人を率いてモンゴル国への合流を表明した。

ドルジエフはロシアに帰国後も、モンゴルとチベット・モンゴル条約を結び、ソ連仏教界のチベット代表となり、ナムダクノヨンもブリヤート開明派の代表的王公となる。升允は辛亥革命の後は宗社党の一員となった。ダライラマ 13 世の宮廷での交流がその後の彼等の活動に影響していることは明らかであろう。

(5) 以上の研究結果は、2019 年に英文著書 *The Resurgence of "Buddhist Government" Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World.*を出版し、さらに同年のパリのチベット学会でも同名のパネルをくむことによって海外に発信した。このパネルの成果はさらに近日刊行予定の *The Early 20th Centruy Resurgence of the Tibetan Buddhist World: Studies in Central Asian Buddhism.*によって公表される。

2020 年度はコロナ禍により海外にでることができなかったが、日本の外務省によるダライラマ 13 世への接近策について研究し、その成果は 2020 年 11 月 13 日（金）～12 月 11 日（金）にかけて早稲田大学歴史館で行われた企画展示『大隈重信とチベット・モンゴル』ならびに同展示のパンフレットによって公開した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 石濱裕美子	４．巻 29
２．論文標題 20世紀初頭、チベットとモンゴルを結んだ二人のモンゴル王公――カンドー親王とクルルク貝子――	５．発行年 2019年
３．雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要	６．最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石濱裕美子	４．巻 41
２．論文標題 大隈重信の東西文明調和論の背景にある19世紀末の普遍主義	５．発行年 2019年
３．雑誌名 史観	６．最初と最後の頁 242-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石濱裕美子	４．巻 96
２．論文標題 「ダライラマ13世によるモンゴル仏教界の綱紀粛正とその意義について」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 桜文論叢』	６．最初と最後の頁 193-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石濱裕美子	４．巻 33
２．論文標題 「ロシア科学アカデミー公文書館所蔵チベット文三書簡の歴史的意義」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『内陸アジア史研究』	６．最初と最後の頁 99-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石濱裕美子	4．巻 29
2．論文標題 「20世紀初頭、チベットとモンゴルを結んだ二人のモンゴル王公――カンドー親王とクルルク貝子――」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』	6．最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石濱裕美子	4．巻 96
2．論文標題 ダライラマ13世によるモンゴル仏教界の綱紀粛正とその意義について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『桜文論叢』	6．最初と最後の頁 193-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石濱裕美子	4．巻 33
2．論文標題 ロシア科学アカデミー公文書館所蔵チベット文三書館の歴史的意義	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『内陸アジア史研究』	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柳澤明	4．巻 別冊3号
2．論文標題 17～19世紀の露清外交と媒介言語	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『北東アジア研究』（島根県立大学　北東アジア地域研究センター）	6．最初と最後の頁 147-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Ishihama Yumiko
2．発表標題 The Impact of the 13th Dalai Lama’s Sojourn in Mongolia: Evoking the National Consciousness of Tibetan Buddhists from 1904 to 1908
3．学会等名 International Association for Tibetan Studies（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 石濱裕美子
2．発表標題 Qing-Tibet Relation Viewed from the Changes in the Dalai Lama's Self-Designation
3．学会等名 第四届清朝与内亜国際学術研討会（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 石濱裕美子
2．発表標題 "Drepung Gomang College which Networked Russian, Mongol and Tibetan Buddhists."
3．学会等名 History Heitages and the Future of Kyakhta: From the Dynamism of Russia, China, Mongolia and Japan（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 柳澤明
2．発表標題 History Heitages and the Future of Kyakhta: From the Dynamism of Russia, China, Mongolia and Japan
3．学会等名 History Heitages and the Future of Kyakhta: From the Dynamism of Russia, China, Mongolia and Japan（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 “Population shifts and ethnic transformation of Non-Chinese groups in the 17-18 centuries Manchuria”
３．学会等名 “Migration, Occupation, and Indigenous Identity in Early Modern Northeast China” in the Association for Asian Studies 2019 Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石濱裕美子
２．発表標題 Emerging split within Dalai Lama and Jebtsundampa:Confrontation between universal and local church
３．学会等名 The effect on Inner- and East Asian relations of the advent of modern international law and the end of the Qing empire in the late 19th and early 20th centuries（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石濱裕美子
２．発表標題 チベット仏教世界の成立と展開
３．学会等名 「東北アジア諸地域における清朝統治の歴史的意味に関する比較研究」第1回研究会(東北大学)
４．発表年 2018年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 Cing ulus bolon oros ulus-un γadaγadu qarilGaγan-du qolboγdaqu mongγol bicig （清露外交中におけるモンゴル語）
３．学会等名 中央民族大学蒙古語言文学系“第二届蒙古文文献国際学術研討会”
４．発表年 2017年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 十八世紀土爾扈特部派往西蔵的三個使団
３．学会等名 “清朝政治発展変遷研究”国際学術研討会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 石濱裕美子・小林亮介・橋誠・井上岳彦	４．発行年 2019年
２．出版社 Union Press	５．総ページ数 256
３．書名 The Resurgence of "Buddhist Government" Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World	

１．著者名 森雅秀編	４．発行年 2018年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 576ページ
３．書名 『アジア仏教美術論集　中央アジアⅡ（チベット）』	

１．著者名 Alex Mckay & Ishihama Yumiko	４．発行年 2021年
２．出版社 Amsteldam University Press	５．総ページ数 260
３．書名 The Early 20th Centruy Resurgence of the Tibetan Buddhist World: Studies in Central Asian Buddhism.	

１．著者名 石濱裕美子　和田大知	４．発行年 2020年
２．出版社 中央ユーラシア歴史文化研究所	５．総ページ数 40
３．書名 大隈重信とチベット・モンゴル	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	柳澤　明 (Yanagisawa Akira) (50220182)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関